

ことばに表われた家族と家——その3 「住む」

西 川 祐 子

佐 藤 方 代

吉 川 寛

山 田 伸 明

水 野 豊

はじめに

われわれの共同研究「ことばに表われた家族と家」(中部大学地域研究所文化プロジェクト)は第3年目によりやく「住む」とは何か、という中心的なテーマを扱うことになった。第1回テーマ「窓」(『国際研究』第3号参照)と第2回テーマ「壁」(同第4号参照)とは共に、家の部分をなす具体的な物とそれを指す名詞とを扱った。対照言語学の方法に不慣れであった一部メンバーにとっては、名詞と名詞の意味範囲の重なりとずれについては、物と物をじっさいに較べながら考えるという、いわば経験的なやり方に助けを求めることが可能であって、やりやすかったからである。そこで語彙、例文の収集と分析だけでなく、写真、図版を集め、ことばが指す物をたしかめ、また同じ物が各文化のなかに置かれるときの配置の違いについても考えた。その結果、第1, 2回の研究論文については、これは言語論のつもりか、それとも比較文化論なのかという疑問ないしは批判が寄せられた。

われわれはここで、この共同研究はことばを素材とする比較文化研究、さらに言うならば現代生活研究を目指していることを確認しておきたい。それぞれの文化背景と歴史を重視しながらも、われわれはわれわれの生活の現在と未来について考えたいのである。

共同研究文化プロジェクトは今年度も毎週の定例研究会をひらき、基礎文献の読み合せ、文献資料の収集、アンケートの作製、アンケートの結果

の整理分析、各人の分担したテーマについての中間報告、討議をつづけてきた。本学工学部建築学科の豊田洋一氏を招き、日本の伝統的建築について解説をおねがいをした。同じく国際関係学部国際関係学科の青木清氏には、法学の観点から「住む」とは何かについて、講義をおねがいをした。

さて今回、「住む」をとりあげるにあたってはまず和英、和独、和仏辞書を参照して、各言語における〈すむ〉⁽¹⁾の対応語として〈live〉(英語)、〈wohnen〉(ドイツ語)、〈habiter〉(フランス語)を選んだ。前々回、前回にひきつづき対照言語学の方法を用い、媒介言語は日本語とする。

共同研究の最中の研究会では、住むことの定義に苦しんだ。結局、「ある場所で生活すること」だとして、生活をするもののうちその場所でしか、つまり家でしかできないことは何かという議論がおこった。現在では家でのみ食事をし、眠るのは幼児と老人に限られるのかもしれない。すでに円地文子の小説に『食卓のない家』があった。家の持つ最後の機能としてそこで眠ることがあり、たとえ食卓がなくなってもベッドは残るといった批評家もいる。しかし単身赴任や残業のあげくホテルに宿泊をくりかえすサラリーマンが特別の存在ではなくなった現在、家は眠りに帰る所という定義さえゆらいでいる。われわれの討論の途中で外泊がいくら重っても少くとも家には着替えをとり帰るという声が上った。なぜわざわざ家で着替えるのか。着替えとはもっとも私的な行為だから私的領域である家であるという答えがおもしろかった。家を定めそこに住む目的は現在では食べるためでも眠るためでもない。空間を占有し財産として所有することが手段ではなく目的そのものとなりつつある。

また現在では生まれ落ちた先祖代々の家に住みつづけてそこで生涯を終える人は少ない。選択肢は限られているとはいえ、住むことは選択の問題になっている。以上のような意識の変化はことばの上にどのような影響を及ぼしているだろうか。

なお〈すむ〉の類語〈くらす〉と〈とまる〉についても、随時に〈すむ〉との比較を行い、〈すむ〉に個有の意味範囲をできるだけ正確に把握するに努めた。

〈すむ〉とは

1. 定義と語源

『日本国語大辞典』（小学館）によれば、現在〈すむ〉は「生活の居所ときめて、その場所に停まる。そこに居ついて暮らす」と定義されている。これ以外の語義として三つ挙げられている。

①男が女のもとに夫として通って行って泊まる（上代、中古の婚姻形態）。

例文「あべの大臣火ねずみのかはきぬもていましてかぐや姫にすみ給ふとな」竹取物語

②鳥獣虫魚など動物が巣をつくって、そこにいる。

③暮らしを立てるための仕事にありつく、就職する。例文「鉄炮あつる足軽にすむ 十石は妻子養ふたねか鳴」西鶴大句数

〈すむ〉に当てられる漢字は「住、棲、栖」であり、一般に〈住〉は人の場合に、「棲」「栖」は動物に対して用いられる。漢字「住」の成り立ちを調べると、「主」については、燈火を示す「丶」印が燭台をあらわす「王」の上に付いて不動の様を示し、「住」はこれに人偏「亻」をそえて人が一か所に動かないでじっとしている様子を表わすという⁽²⁾。

〈すむ〉の語源説は、スウ（窠居）、スメ（巢目）、スム（澄）、シム（ト）などで、巢を同語源とする説が有力である。このうち、「ト」はト^{ぼつきよ}居すなわち、占って良地を選び、居を定めることをあらわす。

辞書で現在「住む」と別見出しになっている〈澄む〉、〈済む〉も、語源上同一だという説がある⁽³⁾。〈澄む〉は濁った水が時間の経過と共に不純物が沈澱することをさし、〈済む〉は物事の混乱に決着がつくことをさす。三語共〈落ちつく〉という共通の意味を持つとされる。したがって、われわれが「住む」を考えるにあたっては時間の長さが問題になるだろう。

2. 関連語句

2.1 類語

〈すむ〉の類語としては〈くらす〉、〈とまる〉、〈すごす〉、〈居つく〉などの他、〈生活する〉、〈居住する〉、〈定住する〉などがある。このうちわれわれは〈くらす〉、〈とまる〉の二語を重要な類語とみなし、以下必要に応

じて〈すむ〉と比較していく。〈くらす〉は〈暗くする〉が原義とされ、「日暮れまで時間を過ごす」の語義が基本であり、そこから「月日をおくる」、「生活する」の語義にもなる。また、〈とまる〉は〈泊まる〉をあててが、〈止まる〉、〈留まる〉、〈停まる〉と同様、停止や到着の意味から「ある場所に、ある時間、継続してとどまる」と定義され、「船が停泊する」、「宿泊する」、「宿直する」の意味をもつ。

2.2 派生語、複合語

〈すむ〉の派生語を品詞別に挙げ、名詞についてはさらに意味内容で分類して提示してみる。

a. 動詞：〈住まう〉

b. 形容詞(連語を含む)：〈住み^あ悪し〉、〈住み^う憂し〉⁽⁴⁾、〈住みが欲しい〉⁽⁵⁾

c. 名詞：① 人をあらわすもの〈住み手〉、〈部屋住み〉

② 場所や建物をあらわすもの〈住まい〉、〈すみか〉、〈住^{すみと}所〉、
〈住^{すみどころ}所〉、〈住場所〉

③ その他〈内^{うちずみ}住〉⁽⁶⁾、〈仮住まい〉、〈里^{さと}住〉⁽⁷⁾、〈住替〉、〈住^{すみ}袂〉⁽⁸⁾、〈住みごち〉、〈住込み〉、〈住み着き〉、〈住み着き顔〉⁽⁹⁾、〈住^{すみなし}成〉⁽¹⁰⁾、〈住^{すみはなれがお}離顔〉⁽¹¹⁾、〈独り住まい〉

〈すむ〉の複合語を、期間、場所(移動)方法(住み方)別に挙げてみる。

a. 期間：〈住^くみ来〉、〈住み住む〉、〈住み遂ぐ〉、〈住み届く〉、〈住み馴れる〉、〈住み^は果つ〉⁽¹²⁾、〈住み古る〉、〈住み古す〉、〈住み渡る〉⁽¹³⁾

b. 場所(移動など)：〈移り住む〉、〈住み^{うか}浮る〉⁽¹⁴⁾、〈住み替える〉、〈住^{はな}み離る〉⁽¹⁵⁾

c. 方法(住み方など)：〈隠れ住む〉、〈住み^{あか}散る〉⁽¹⁶⁾、〈住み荒らす〉、〈住み隠る〉⁽¹⁷⁾、〈住み込む〉、〈住み^す捨つ〉⁽¹⁸⁾、〈住み着く〉、〈住み成す〉⁽¹⁹⁾、〈住み満つ〉⁽²⁰⁾、〈住み煩う〉⁽²¹⁾、〈住み侘びる〉⁽²²⁾

複合語の多くは現在使用されないが、数は多く、特に期間をあらわすものはほとんど〈長く住み続ける〉の意味で、〈住む〉が定住の観念を強くもつことがうかがえる。

次に、〈くらす〉の派生語を挙げる。

〈暮らし〉、〈暮らし方〉、〈暮らし向き〉、〈暮らし負け〉⁽²³⁾、〈その日暮らし〉、〈一人暮らし〉

〈くらす〉の複合語には次のようなものがある。

〈明かし暮らす〉⁽²⁴⁾、〈遊び暮らす〉、〈言い暮らす〉、〈暮らし明かす〉、〈暮らし煩う〉⁽²⁵⁾、〈暮らし侘ふ〉⁽²⁶⁾、〈泣き暮らす〉

〈とまる〉の派生語を挙げる。

〈泊まり〉、〈泊まり明け〉、〈泊まり掛け〉、〈泊まり込み〉、〈泊まり番〉、〈泊まり札〉⁽²⁷⁾、〈泊まり船〉、〈泊まり宿〉、〈泊まり山〉⁽²⁸⁾

〈とまる〉の複合語には次の語がある。

〈泊まり歩く〉、〈泊まり合せる〉、〈泊まり込む〉

以上みてきたように、〈くらす〉、〈とまる〉の派生語、複合語は〈すむ〉とくらべればややよくない。

2.3 諺、成句

辞書、辞典等に挙げられている〈すむ〉を含む成句、諺類を主語の別に分類して提示してみる。

a. 人が主語の場合

- ①三軒長屋の真ん中に住むと病人が絶えぬ
- ②住めば田舎も名所
- ③住めば都（寂しい田舎や不便な所でも、住み慣れれば離れにくいものだということ、転じて、物質的侘しさも慣れれば、精神的楽しさになるということ）
- ④住まば都（同じ住むなら都がよいということ）
- ⑤一つ屋根の下に住む（同じ家の中で生活する）
- ⑥人は情けの下に住む（人は互いの人情に守られて生きている）
- ⑦見ては極楽住んでは地獄

人を主語とする場合、「三軒長屋、都、田舎、屋根の下」など形として場所が多くあらわれる。問題は〈住む〉場所が適切かどうかであり、住み方は重視されていない。

b. 超自然物（神、鬼）が主語の場合

⑧鬼住む里へも行く（どんなに辛い、恐ろしい所へでも行く決心をする
たとえ）

⑨金箱の底に厄神^{やくじん}が棲む（幸せを保証する金箱の底が、実は疫病神の住家でもある→幸せであること自体が不幸の原因でもあるということ）

⑩寺の隣にも鬼が住む（慈悲深い人のそばにも無情冷酷な人がいる、世の中には善悪の人が混じり合っているというたとえ、〈寺の門前に鬼が住む〉、〈仏の前に鬼が住む〉も同じ）

c. 動物が主語の場合

⑪魚は水に棲んで水を濁し、鳥は木に棲んで木を枯らす（恩を仇で返す
仕打ちをいう）

⑫枳棘^{ききよく}は鸞鳳^{らんほう}の棲む所に非^{あら}ず⁽²⁹⁾（賢人は居る所を選ぶというたとえ→中国故事）

⑬狐は百里続く国ならでは棲まず（狐は広大な土地でないと住み着かない）

⑭倉に住む鼠は米穀を食して楽しみ、厠^{かわや}に住む鼠は糞土を食して楽しむ（それぞれ分に応じた楽しみ方がある、環境によって、心持ちに高下が生じる）

⑮清水に魚棲まず〈水清ければ魚住まず〉も同じ）

⑯大魚は小池に棲まず（大人物はつまらない地位に甘んじていることはできない、大才はその才に相応しくない所にはいないというたとえ）

⑰虎は千里続く国ならでは住まず（大才はその才を生かせるような境遇の中にしか住めないことのたとえ、〈虎は千里の藪に住む〉も同じ）

⑱林深ければ鳥棲み、水広ければ魚遊ぶ（徳を積み仁政を行えば、自然に多くの人が徳を慕って集まってくることのたとえ）

⑲良禽は木を選んで〔相して〕住む（名臣賢臣はその主君をよく選んで仕えるというたとえ）

動物を主語にとるものは、各動物の特性により、棲むことの可否を論じて、教訓にするものが多い。動物においても場所が重要であり、必ず場所が言及される。種類の多さを反映して、「国、山、林、藪、倉、木、池、沼」など各生き物のすみかがあらわれている。住み方はやはり問題視されている。

ない。

次に、〈くらす〉についてみるが、主語はすべて人に限られている。

- ㉔蝦夷^{えぞ}で暮らすも一生、江戸で暮らすも一生
- ㉕親の無い里には暮らせるが火箸^{ひしる}の無い里には暮らせぬ（生活には火が欠かせないということ）
- ㉖汚く稼いで清く暮らせ（㉗職業的の身分は低くても、懸命に働いて精神は気高くて暮らせ ㉘不条理な金儲けをしても、使うときだけは潔くきれいに使え ㉙上品でも満足に飯の食えない職業ではしかたがない）
- ㉚心に笠着て暮らせ（高望みをせず、分相応にくらせ）
- ㉛五十年暮らして四十九年の非は知る（人生は失敗の連続で、後悔することが多い）
- ㉜盛りの花を野で暮らす（働き盛りのときを、才能を持ちながら世間に知られることなく年老いてしまう）
- ㉝三人子持は笑って暮らす（子供三人くらいが一番幸せな暮らしである）
- ㉞十人暮らしは易けれど一人口はくらせぬ
- ㉟何処で暮らすも一生
- ㊱泣いて暮らすも一生笑って暮らすも一生
- ㊲二月ひと月は小糠^{こぬか}三合で暮らす（二月は日数が少なく、生活費もさほどかからないように感じる）
- ㊳左団扇^{うちわ}で暮らす
- ㊴への字なりに暮らす（なんとか暮らしを立てる）
- ㊵待てど暮らせど
- ㊶柳で暮らせ（気楽に暮らすのがよいこと、〈世は柳で暮らせ〉も同じ）
- ㊷横に暮らす（世の道理を無視して気ままに生きる）
- ㊸六十年は暮らせど六十日は暮らし兼ねる（ただ単に生きていくだけなら六十年も暮らせるが、世間体を保って生活していくのは、短くてもむずかしいものということ）

以上 17 例中、暮らす場所はあまり問題になっていない。㉔(蝦夷, 江戸)

㉑ (里) ㉕ (野) に場所のことばがあるものの、〈何処で暮らすも一生〉と言われるように重要なこととして扱われていない。時間 (期間) も三例 (㉔ ㉓ ㉖) あるが、それほど重要な問題として出ていない。むしろ、全般的には方法手段 (暮らし方) にウエイトがおかれているといえる。たとえば、㉓ (心に笠着て) ㉓ (小糠三合で) ㉔ (への字なりに) ㉔ (柳で) ㉕ (横に) などである。その他副詞的語句「清く、汚く、泣いて、笑って、遊んで」などと共に〈暮らす〉が多く使用され、庶民生活の風刺や訓戒が表現されている。

〈とまる〉については次の二例である。

㉗ 上は昼、中は夜行き、下は泊まる、下下のお客は居続けをする (遊女屋の客の良し悪し)

㉘ 葬式の晩泊まると七日泊まらなければいけない (仏の魂が乗り移ることをいう)

以上関連語句においては、2.2, 2.3 でみたとおり、〈すむ〉は長時間一定の場所に留まることが問題になっている。これに対して、〈くらす〉は生活方法が問題とされ、「時間、場所」はさほど重要視されない。また〈とまる〉は短期間の一時的滞在を示しているといえる。

3. 他の語との共起関係

〈すむ〉は、基本的には次のような構造をとる動詞と考えられる。

主語 + が + 場所 + に + 名詞 + と + 時間 + すむ⁽³⁰⁾

以下、上記の下線を施したそれぞれの語句との共起関係について、アンケート結果をベースに調べてみた⁽³¹⁾ また、比較のため、必要に応じて〈くらす〉、〈とまる〉にも触れる。

3.1 主語との共起

便宜上、主語が人間の場合とそれ以外の場合に分けて考える。

3.1.1 人間の場合 (Xが...)

	すむ	くらす	とまる
(1) 家族	(○)	(○)	(○)

- | | | | |
|----------|-----------------------------|-----------------------------|---------------------------|
| (2) 核家族 | (☐) | (☐) | (☐) |
| (3) 集団 | (?) | (?) | (☐) |
| (4) 国民 | (? ×) | (?) | (? ×) |
| (5) 一座 | (☐ ?) | (☐ ?) | (☐) |
| (6) 王 | (☐ ?) | (?) | (☐) |
| (7) 親 | (☐) | (☐) | (☐) |
| (8) 子供 | (☐ ?) | (☐) | (☐) |
| (9) 兄 | (☐) | (☐) | (☐) |
| (10) 弟 | (☐) | (☐) | (☐) |
| (11) 男 | (☐) | (☐) | (☐) |
| (12) 女 | (☐) | (☐) | (☐) |
| (13) 夫 | (☐) | (☐ ?) | (☐) |
| (14) 妻 | (☐) | (☐ ?) | (☐) |
| (15) 妾 | (☐) | (☐ ?) | (☐) |
| (16) 情夫 | (☐) | (☐ ?) | (☐) |
| (17) 娘 | (☐) | (☐) | (☐) |
| (18) 老人 | (☐) | (☐) | (☐) |
| (19) 若者 | (☐) | (☐) | (☐) |
| (20) 女中 | (☐ ?) | (☐ ?) | (☐) |
| (21) 遊牧民 | (☐ ?) | (☐) | (☐) |
| (22) 放浪者 | (☐ ?) | (☐ ?) | (☐) |
| (23) 客 | (? ×) | (? ×) | (☐) |

上記の結果から言える事は、家族より一座、一座より集団、集団より国民と、サイズが大きくなるに従って許容度が下がる傾向があるということである。これは、物理的に考えても当然のことと言える。個人レベルの語彙においては、若干の差はあっても原則として共起可能である。〈くらす〉、〈とまる〉の二動詞についてもほぼ同様な事が言える。あえて言えば、〈子供〉が〈くすむ〉で、少数ではあるが抵抗感を覚えるインフォーマントがいるようである。ここには挙げなかったが、末尾の資料(111), (114), (115)の特定状況を設定したアンケートにも同様な結果がみられる。つまり、一

人あるいは複数でも〈子供〉だけが住んだり、暮らしたりするのは通常考え難いということなのであろう。また、〈夫〉や〈妻〉や〈兄〉の所謂親族名称も、〈くらす〉で少数ではあるが非とする者がいるし、〈すむ〉でも、すべて（○）ではあるが、％数はそれぞれ 86, 82, 82 で、他の（○）に比べて若干低い数値である。これは、家族は本来同居すべきものだという一般通念からくる違和感があり、若干許容度が下がったのではないだろうか。

〈妾〉と〈情夫〉が〈くらす〉で許容度が低いのは、その様な人達と一般的な生活感との結びつきに抵抗を感じたものと考えられる。我々の言語直観から言えば、〈客〉は、その意味機能に一過性を有する語なので〈とまる〉以外の動詞とは共起しにくいのは当然である。リストには出さなかったが、〈旅行者〉も〈客〉以上に許容度が低かった。同様に、いわゆる住所不定の〈放浪者〉も〈すむ〉、〈くらす〉、特に〈くらす〉と共起しにくく、〈とまる〉と問題がないのも語の持つ意味からみて理解できる。〈女中〉が少し許容度が低いのは、後で詳しく述べるが、〈すむ〉の持つ私有性の意味特性と無縁ではないだろう。〈とまる〉は物理的に不可能な〈国民〉以外ほとんど問題なく共起する。

以上の事から言える事は、〈すむ〉より〈くらす〉の方が許容範囲が若干狭いと言う事である。これは、〈くらす〉の方が〈すむ〉より具体性を要求する動詞なので共起可能な主語に制約を課するからと考えられる。

3.1.2 その他の場合 （Xが...）

	すむ	くらす	とまる
(24) 神	(○?)	(×)	(×)
(25) 仏	(?×)	(×)	(×)
(26) 幽霊	(?)	(×)	(×)
(27) 先祖 ⁽³²⁾	(?)	(?)	(×)
(28) 子孫 ⁽³²⁾	(○?)	(○?)	(?×)
(29) 死者 ⁽³²⁾	(?)	(?×)	(×)
(30) 熊	(○?)	(×)	(×)
(31) 牛	(?)	(×)	(×)

- | | | | |
|-----------|------|------|-----|
| (32) 猫 | (○?) | (?×) | (×) |
| (33) ゴキブリ | (○?) | (×) | (×) |
| (34) 魚 | (○?) | (×) | (×) |
| (35) 鳥 | (○?) | (×) | (×) |
| (36) 松の木 | (×) | (×) | (×) |
| (37) まりも | (?×) | (×) | (×) |
| (38) 病原菌 | (?×) | (×) | (×) |
| (39) 希望 | (×) | (×) | (×) |

(24) から (39) までは〈すむ〉との許容度が予想以上に高い。前章の諺の所で〈すむ〉は超自然物が主語になる例が多く見られた。ここでも同様な傾向が見られる。〈神〉は一番許容度が高く 64%であった。これは、〈くらす〉、〈とまる〉に比較して〈すむ〉は動詞としての抽象度が高いためであると考えられる。〈くらす〉と〈とまる〉は、前述したように、具体性を要求する動詞であるので人間以外の語とは共起が困難であると考えられる。特に、〈とまる〉はその傾向が顕著である。

動物についても同様の事が言える。やはり〈すむ〉の許容度の高さが目立つ。しかし、〈熊〉より〈牛〉の許容度が無視できない程低い(%数はそれぞれ 79, 50) のは何を示唆しているのだろうか。野性と家畜の差であるならば、〈すむ〉は自立性を要求する傾向があるのだろうか。もしそうだとすれば、3. 1. 1 の〈子供〉で述べた事と共通性があると言える。植物は、〈松の木〉の例に見るように、三動詞とも殆ど完全に共起不可能である。〈希望〉のような抽象名詞も同様に許容度が極めて低いが、〈すむ〉の許容度が他の動詞と比較すれば高いのは、前述した〈すむ〉が有する抽象性の意味機能と無関係ではないであろう。前章の諺で〈くらす〉の主語は人に限られたがここでも同様な結果となり二重の裏付けとなる。

以上、主語との共起関係について述べたが、まとめとして許容度の高さで比較すると次のようになる。

表 1 主語を表す語句との共起

			す　　む	くらす	とまる
人	個 人	親　　族　　名　　称	○	○？	○
		一時的呼称 ⁽¹⁾	？×	？×	○
		一　般　の　場　合	○	○	○
	小　　　　　集　　　　団		○	？	○
	大　　　　　集　　　　団		？×	？	？×
	そ　　　　の　　　他 ⁽²⁾		？	？	×
動 物	野　　　　　　　　　　性		○？	×	×
	家　　　　　　　　　　畜		？	×	×
	そ　　　　の　　　他 ⁽³⁾		○？	×	×
植　　　　　　　　　　物			×	×	×
超　　自　　然　　物 ⁽⁴⁾			？	×	×
抽　　象　　名　　詞			？	×	×

(1) 〈客〉, 〈旅行者〉等

(2) 〈先祖〉, 〈死者〉等

(3) 魚類, 虫等

(4) 〈神〉, 〈仏〉等

3.2 場所を表す語句との共起

3.2.1 限定された空間

3.2.1.1 私的空間

	すむ	くらす	とまる
(40) 下宿	(○)	(○ ?)	(○)
(41) ホテル	(○ ?)	(○)	(○)
(42) 海の家	(○ ?)	(○)	(○)

(43) 学生寮	(○)	(○)	(○)
(44) 老人ホーム	(○)	(○)	(○ ?)
(45) 養老院	(○ ?)	(○)	(○)
(46) 別荘	(○)	(○)	(○)
(47) 蔵	(○ ?)	(○ ?)	(○ ?)
(48) 物置	(○ ?)	(○)	(○ ?)
(49) テント	(○)	(○)	(○)
(50) 2DK	(○)	(○)	(?)
(51) 二階	(○)	(○)	(○)
(52) 地下	(○)	(○)	(○)
(53) 屋根裏	(○)	(○)	(○ ?)
(54) 居間	(? ×)	(○ ?)	(○ ?)
(55) 台所	(?)	(?)	(? ×)
(56) 座敷	(? ×)	(?)	(○)
(57) 部屋	(?)	(?)	(○ ?)
(58) 女中部屋	(○ ?)	(○)	(○)
(59) 船	(○ ?)	(○)	(○ ?)
(60) 車	(? ×)	(?)	(○ ?)
(61) 馬車	(? ×)	(○ ?)	(○ ?)
(62) キャンピングカー	(?)	(○)	(○)

まず、生活行為が可能な私的空間あるいは準私的空間 (40) ~ (50) の建造物を表す語は全体的に三動詞とも高い許容度を示している。詳しく見ると、〈すむ〉に対する〈ホテル〉、〈海の家〉、〈養老院〉、〈蔵〉、〈物置〉、それに〈とまる〉に対する〈老人ホーム〉、〈蔵〉、〈物置〉、〈2DK〉の許容度がそれぞれ若干低くなっている。まず、〈蔵〉、〈物置〉は、本来人間が長時間居ることはしない場所なので三動詞とも共起にくいのは当然である。

〈ホテル〉、〈海の家〉は、一般には短期滞在の宿泊施設と認識されているので〈すむ〉との共起に若干抵抗を覚えたのであろう。これらは次の公的空間に入れた方がいいのかもしれない。〈くらす〉と〈下宿〉は、やはり臨時、あるいは仮の空間であって、本来の暮らす場所は他にあるとの解釈に

起因すると考えられる。〈とまる〉と〈2DK〉は共起しにくい。〈2DK〉は、家屋の様式を表す語であるので住んだり暮らしたりする時には問題になるが、泊まる時には余り関係ないので許容度が低くなったのであろう。〈老人ホーム〉は〈とまる〉の許容度が低く、〈養老院〉は〈すむ〉の許容度が低いのは、同じような施設なのにそれぞれの語の持つイメージが異なるから出て来る差異なのであろう。つまり、〈老人ホーム〉は老人が自ら決めて入居する施設であり、〈養老院〉は一種の収容施設と考えられているからではないだろうか。以上の事から〈すむ〉については住む空間の私有権、あるいは専用使用権が問題になると考えられる。また、正常な居住行為が可能な建造物であるかないかにも敏感にならざるをえないのだろう。〈テント〉が全ての動詞と問題なく共起するのは、マスコミによる難民キャンプの情報や、サーカスなどのテント生活者のイメージによると思われる。

(51) から (58) までのいわゆる家屋の下位語に関しては次のような事が言える。まず、(51), (52), (53) の語は全て位置を表す下位語であるので、〈すむ〉をはじめ三つの動詞との共起は問題ないと考えられる。しかし、〈地下〉、〈屋根裏〉は、日本の家屋ではまだ珍しいのに高い許容度を示しているのはイメージが実態より先行していると言う事であろう。(54) から (57) までは全て機能別の下位語であって、それぞれの機能が特定されてしまうので〈すむ〉、〈くらす〉については全体的に許容度が低い。〈とまる〉については、実際に〈台所〉に泊まることは非常時以外にはまれな事なので低くなっているが、他は問題ない。(58) が全ての動詞で許容度が高いのは、〈女中〉が付加する事により具体性と私有性が高まった為であろう。(59) から (62) までの可動物について見ると、〈すむ〉が〈車、馬車〉に問題があるのは、それらの可動物の物理的大きさと特定された機能目的の故に許容度が低くなったと考えられる。

3.2.1.2 公的空間

	すむ	くらす	とまる
(63) 刑務所	(? ×)	(○ ?)	(?)
(64) 少年院	(? ×)	(○ ?)	(○ ?)

(65) 捕虜収容所	(? ×)	(○ ?)	(? ×)
(66) 孤児院	(?)	(○ ?)	(?)
(67) 病院	(? ×)	(○ ?)	(○)
(68) 会社	(? ×)	(×)	(○ ?)
(69) 学校	(? ×)	(? ×)	(○ ?)
(70) 大学	(? ×)	(?)	(○)
(71) 軍隊	(×)	(○)	(×)
(72) 企業	(×)	(×)	(×)
(73) 駅	(? ×)	(○ ?)	(○ ?)
(74) 道端	(? ×)	(○ ?)	(? ×)
(75) 橋の下	(○ ?)	(○)	(○ ?)
(76) 公園	(?)	(○ ?)	(○ ?)

〈すむ〉は〈橋の下〉以外全般的に許容度が低い。〈橋の下〉は私的空間としての使用の可能性が高く、実際にその様な使用が、現在でこそ少なくなったが、以前にはよく行われていたという特殊事情の故に高い許容度を示していると思われる。前述した〈すむ〉と〈ホテル、海の家〉との若干の許容度低下とあわせて考えると、〈すむ〉の意味特性に「私有」を入れるのはあながち的外れではないだろう。〈くらす〉は全体的に見て最も共起しやすいが、〈会社〉、〈学校〉、〈大学〉、〈企業〉と共起しにくいのは、それらが仕事の場で生活の場ではないということである。〈とまる〉も〈軍隊〉、〈企業〉以外は全般的に許容度が高い。これら二語の許容度が低いのは具体性が少ないからであろう。

3.2.2 広範囲な地域

	すむ	くらす	とまる
(77) 国外	(○)	(○)	(?)
(78) 国内	(○)	(○)	(? ×)
(79) 回教圏	(○)	(○)	(? ×)
(80) 英語圏	(○)	(○)	(×)

地域を表す語は、〈すむ〉、〈くらす〉とも問題なく共起可能である。〈と

まる〉は際立って許容度が低いが、これは〈とまる〉行為は、前述したように、比較的狭い特定された空間と言う具体性を要求する動詞だと考えられるからである。

3.2.3 抽象的空間

	すむ	くらす	とまる
(81) 芸能界	(? ×)	(○ ?)	(×)
(82) 上流社会	(○ ?)	(○)	(×)
(83) 高齢社会	(?)	(○ ?)	(×)
(84) 管理社会	(○ ?)	(○ ?)	(×)
(85) 心の中	(○)	(×)	(×)

〈すむ〉と〈くらす〉が〈・・・社会〉との共起が予想以上に可能なのには驚かされた。その理由ははっきりしないが、多分〈社会〉という語が有する特性がその様な結果を導いたのであろう。そうでないとすると、〈芸能界〉との差異の説明が困難である。〈すむ〉で、特に〈心の中〉が極めて高い許容度を示す理由はよく分からない。〈くらす〉は〈心の中〉の語との共起だけが極めて低い。これは〈心の中〉が一番抽象度が高いことが影響しているのであろう。〈とまる〉は、抽象性のある語に対しては特に敏感に反応し、全て共起困難となっている。これは何度も述べたように、具体的空間を必要とする動詞であるからであろう。

以上、場所を表す三動詞との共起関係について調べてきたが、総括すると次のようになる。まず、〈くらす〉が最も問題がなかった。これは、極言すれば、〈くらす〉はどこであれ日常の生活行為が行われればよしとして、行われる場所は余り問題としない動詞であると言える。この結果は、前章で〈くらす〉が場所、時間との共起は余り問題がなく、どの様に〈くらす〉かが最大の関心事であるとした結果と共通である。3.1と同様に表にすると次の様になる。

表2 場所を表す語句との共起

				す　む	くらす	とまる	
具 体 的 空 間	限 定 空 間	私 的 空 間	一　般 ⁽¹⁾	○	○	○	
			下 位 語	位　置 ⁽²⁾	○	○	○
				機　能 ⁽³⁾	?(×)	?	?
			可　燃　物 ⁽⁴⁾	?	○?	○?	
		公　的　空　間		?×	?	?	
		広　範　囲　な　空　間 ⁽⁵⁾		○	○	?○	
	抽 象 空 間	・　・　・　社　会		○?	○?	×	
そ　の　他 ⁽⁶⁾		○	×	×			

(1) 〈家〉に代表される最も一般的な建造物

(2) 〈二階〉, 〈地下室〉等

(3) 〈台所〉, 〈居間〉等

(4) 〈車〉, 〈船〉等

(5) 都市, 国名等

(6) 〈心の中〉等

3.3 同居の共起関係

	すむ	くらす	とまる
(86) 数家族	(○)	(○)	(○)
(87) 国民	(×)	(×)	(×)
(88) 集団	(?)	(?)	(? ×)
(89) 小学生の子供	(○)	(○)	(○)
(90) 男	(○)	(○)	(○)
(91) 女	(○)	(○)	(○)
(92) 夫	(○)	(○)	(○)
(93) 妻	(○)	(○)	(○)
(94) 客	(? ×)	(?)	(○)
(95) 他人	(○)	(○)	(○)

- | | | | |
|---------|--------|--------|------|
| (96) 犬 | (○ ?) | (○ ?) | (?) |
| (97) 猫 | (○ ?) | (○ ?) | (?) |
| (98) 家具 | (? ×) | (? ×) | (×) |

個人 (89)～(95)の場合は、〈客〉を除いて、三動詞とも問題ない。〈客〉が〈くすむ〉、〈くらす〉で許容度が低いのは、3.1 で述べたように〈客〉は一過性のものであるからと言えよう。集団 (86)～(88)については、三動詞とも、全て集団の規模が大きくなるにつれて許容度が下がる傾向が顕著に見られる。これも 3.1 で述べたように物理的な理由によると考えられる。人間以外で、ペットである〈犬〉、〈猫〉は飼い主とともに住んだり、暮らしたりするが、泊まり先では飼い主の権限が制限されるので、ともに泊まる事には問題があるようだ。〈家具〉について〈くすむ〉、〈くらす〉で 20%強の人が是であるとしたのは、家具への愛着とか、狭い家に家具が詰まっていた「まるで家具と住んで (暮らしして) いるようだ。」の如きアイロニックな表現などがそのような結果をもたらしたと思われる。ここでの例文は個人の場合、主語が何であるかによって差異が出てくるのではないかと考えて、最後に載せた資料の (122)～(129) のアンケートを行ってみたが、そのような差異は現れなかった。これは、元々そのような差異がないのか、あるいは、更に場所とか時間とかの条件を付加すれば差異が現れるのかは今後更に検討する必要がある。

いずれにしても、ここでの例文で見える限り 3. 1 の主語との共起の場合と大差ない結果と言えよう。

3.4 時間を表す語句との共起

- | | | | |
|--------------|-------|-------|--------|
| | すむ | くらす | とまる |
| (99) 五日 | (?) | (?) | (○) |
| (100) 二週間 | (○ ?) | (○ ?) | (○) |
| (101) 四ヶ月 | (○) | (○) | (○ ?) |
| (102) 半年 | (○) | (○) | (○ ?) |
| (103) 朝から晩まで | (×) | (?) | (? ×) |
| (104) 平日に | (?) | (?) | (○) |

- | | | | |
|-------------|------|------|------|
| (105) 週末に | (○?) | (○?) | (○) |
| (106) しばらく | (○) | (○) | (○) |
| (107) 三度 | (?) | (?×) | (○) |
| (108) 毎日 | (?) | (○?) | (○?) |
| (109) とときどき | (○?) | (○?) | (○) |
| (110) たびたび | (?) | (○?) | (○) |

当然の事ではあるが、期間を表す語 (99) ~ (102) との共起については、
 <すむ>、<くらす>は期間が長くなるにつれて許容度が高くなっているが、
 <とまる>はその逆になっている。この事から <すむ>、<くらす> は、あ
 る程度長い期間（どれ位かは個人差がある）その状態が続行する必要があ
 り、<とまる>はその意味に一過性が有ることが分かる。後に統語論の所で
 述べるが、<くらす> は「一日中遊んで暮らす」のように（ある状態または
 行為を一日中続ける）の意味と、「少ない金で細々と暮らす」のように（生
 活をある程度長い期間続ける）の意味の二通りがある。<朝から晩まで>に
 ついて、<くらす>との共起関係を4割強のインフォーマントが是としている
 のは、前者の意味に解した結果である。<とまる>の許容度が低いのは、
 森田(1977)の言うように <とまる> は夜を越す必要があるからであろう。
 いずれにしても、<朝から晩まで>を期間として考えると、やはり<すむ>、
 <くらす>について最低の許容度である事は納得できる。(104), (105) が
 予想に反して是と答えたインフォーマントが多かったのは、日本における
 ライフスタイルの変化を反映していると言ってもよいであろう。

前述したように、<すむ>は何処に住むかが大きな問題であり、<くらす>
 はどの様に暮らすかが問題である。<すみかえ>の語でも分かるように、住
 む場所を自己の選択で変更した新たに住み始める事が可能であるし、ま
 た住所不定の放浪者は <すむ> のを停止する事ができる。この様に考える
 と、<すむ> が (107), (109), (110) の回数や頻度を表す語との共起が可
 なり可能である理由が分かる。<くらす> は、<いきる>と同様に、どの場
 所であれ、どんな状況であれ <くらす> のを停止する事はできない。この
 様に考えると、(107) の <三度> との許容度の低さは理解できる。しかし、
 問題なのは (109), (110) における許容度の高さをどの様に説明したらよ

いであろうか。先に述べた〈くらす〉の前者の意味をインフォーマントが想定したのだと言えなくもないが、想像の域をでない。更に詳しい調査が必要である。

4. 統語論上の問題点

2節、3節での検討から〈すむ〉と場所とのかかわりが大きいこと、住むにはある程度長い期間が必要であることがわかった。さらに3節のアンケート調査から〈すむ〉は空間の占有性、時には私有性が大きくかかわってくるということが推定できる。

ここでは前節まであまり考慮に入れられなかった、〈すむ〉とその関連語句の統語論上の問題点を簡潔に論じたい。

〈すむ〉〈くらす〉〈とまる〉はいずれも、(1)の例からもわかる様に、〈いる〉とは異なり、終止形のみでは、抽象概念、あるいは、まだ実現されていないことがらをあらわす。山下(1979:39)の用語を借りるなら、いわゆる「未然」のことがらしか示さない。

- | | | |
|-----|------------------|------|
| (1) | ここに <u>いる</u> 。 | 〈已然〉 |
| | ここに <u>住む</u> 。 | 〈未然〉 |
| | ここで <u>暮らす</u> 。 | 〈未然〉 |
| | ここに <u>泊まる</u> 。 | 〈未然〉 |

現在行なわれていることから、すなわち「已然」を示すには、(2)の様に〈～ている〉形をとらなければならない。

- | | |
|-----|---------------------|
| (2) | ここに <u>住んでいる</u> 。 |
| | ここで <u>暮らしている</u> 。 |
| | ここに <u>泊まっている</u> 。 |

さて、森田(1984:151)、(1986:22)、神尾(1980:55-63)を参考にすると、これらの動詞のとる統語的なパターンは(3)のようになる。

- | | |
|-----|------------------------|
| (3) | AがBに <u>住む／住んでいる</u> 。 |
|-----|------------------------|

A が B で暮らす／暮らしている。

A が (B で) B' に泊まる／泊まっている。

この様なパターンから各動詞がどのような特徴を持っているかを論じるのが本節の中心的なテーマである。しかし、その前に (3) のパターンには示さなかったその他の表現との共起関係についても少しふれてみよう。第一に、〈娘と住む／暮らす／泊まる〉の様に、〈と〉という表現とこれらの動詞は共起可能である。しかし期間の場合は各動詞の意味特性により、共起し得る表現が異なる。〈すむ〉の場合は (4) の例からもわかる様に4ヵ月では短かすぎると感じられる。従って、ある程度長い期間をあらわすものと共起することがほとんどであるといえる。

- (4) 一九六七年、妻と私は子どもたちを残して、四ヵ月という短い期間ではあるけれども、ニューヨーク市の高層アパートの二十七階に住んだ。
(谷川, 1979: 217)

また、〈くらす〉の場合は多義的であり、いろいろな辞書の定義からわかるように、どの意味で用いられるかで共起する期間の表現が異なる。“一日をすごす”という意味では (5 a) からわかる様に、一日間をあらわすものでも共起可能である。しかし、“ある月日をすごす”の意味にとれる (5 b)、さらには“長いあいだしつづける”の意味ではかなり長い期間をあらわす表現と共起する。

- (5) a. きょうは一日中家の中で暮らした。

- b. 春休みは別荘でくらしたい。

ところで、〈とまる〉はその意味から一晚をこせば〈一日〉とも共起可能である。

さて、いずれの語句も動詞であるから、〈楽しく〉〈別々に〉等、副詞的要素とも程度の差はあるにせよ共起可能であるが、この点は 4.2 であつかうことにする。

4.1.1 場所をあらわす格助詞

(6) a. 図書館 $\left\{ \begin{array}{c} *に \\ 下 \end{array} \right\}$ 本を読む。

b. レストラン $\left\{ \begin{array}{c} * \text{に} \\ \text{で} \end{array} \right\}$ コーヒーを飲む。

一方、〈くらす〉は場所をあらわす場合は〈で〉としか共起しないといわれている。森田(1984: 152)によれば「…テ格に立つ動詞はいずれも行動的である」, 従って〈に〉ではなく〈で〉をとる〈くらす〉にはそれだけ動作性があるとしている。また、神尾(1980: 56-7)によれば「〔で〕によ

る場所の指定は…述語句に伴うのではなく、文全体に結びつくものと考えられる」としている。さらに、中島（1987：128）には「『東京で暮らす』では生活行動の場が意味されている」と記述されている。以上の点から、〈暮らす〉の方が〈すむ〉より動作性が強く、また場所との直接的なかわりが少なくなるといえよう。従って、神尾（1980：60）の「『くらす』は生活上の諸活動を行うことを意味し、それ自身のうちには場所の概念を含んでいない」という定義は、期間に関する記述はないが、核となる〈くらす〉の意味の定義としてはある程度当を得ている。

ところで、〈とまる〉は、普通に〈を〉をとるから場所性が強いといえるが、神尾（1980：51）でも述べられている様に、これはさらに大きな背景的な場所を示すのに〈で〉を用いることができるという特徴もある。

(7) a. ホテルに泊まる。

b. 東京でホテルに泊まる。

さて、〈すむ〉〈くらす〉は、すべて(3)のパターンで示した場所をあらわす格助詞と生起するかという点必ずしもそうではない。たとえば、格助詞〈へ〉と生起する例が書かれたものの中にはみられた。(8)(9)がそれである。

(8) 五十九年から経営を引き継ぎ、大須へ住むようになった。(朝日新聞、1987年11月18日朝刊)

(9) ということは100年の土地を持って、そこへ住むということはほとんど絶望的やね。(『人生読本一住まい』、1980)

(8)、(9)は筆者にとっては少し文法性が低く〈移り住む〉の〈移る〉が省略されていると考えないと理解しがたい。しかし、佐久間(1952：143-4)によれば、江戸言葉の特徴が東京語に受け継がれたものであり、「移動の方向とその帰着点とを示す」のに関東では〈へ〉を用いることがあるということである。

次に、〈すむ〉でも〈で〉をとって場所をあらわす例がまれであるがみら

れる。(10), (11) がその例である。

- (10) 砂漠の真ん中の回教圏で住むというのはいったいどういうことを意味するか。(谷川, 1979: 92)

- (11) その村で住むということについて一つだけすごいなと思ったのは、何か事があると、終始会合するわけです。(同上, p.47)

上の例、特に (11) では、そこでの生活上の諸活動が問題になっているから <で> が使われていると考え得る。すなわち、この場合の <すむ> は、<くらす> <生活する> とほぼ同じ意味で用いられているといえる。

さて、<一緒に> <主体的に> というような表現が <すむ> を含む文中に生じた場合は必ず <に> ではなく <で> をとる。(12) (13) がその例である。

- (12) この町で一緒に住むために高校の先生になった。(英語教育, 1988 年 3 月号, p.25)

- (13) しかし、安定した地域の中で主体的に住むのでなければ、人は主になれず住まいは人を育てられないのだと思う。(早川, 1984: 8-9)

(12), (13) の様な例をどう説明したら良いであろうか。日本語変形成文法では同一単文内で同じ助詞を使うと非文になると考えられている。この考え方でゆくと、助詞のくり返しを避けるために <町に> が <町で> に変わったという説明になるであろう。しかし、(14) の様に <に> をとらない <ともども> という副詞的表現が共起した場合も <に> ではなく <で> が用いられているところからするとくり返しを避けるために <で> が使われているという説明は必ずしも当を得ているとはいえない。

- (14) かつて私がニューヨーク郊外で家族ともども住んだ家は、……
(英語教育, 1988 年 3 月号, p.10-1)

むしろ、居所を定めれば、その中で生活活動が行なわれるのが普通であり <一緒に> <主体的に> <ともども> 等は後者の面に焦点をあてるから <で>

が使われると考えたほうが良い。この場合も〈くすむ〉が〈くらす〉の意味に近くなっているから〈で〉が使えるといえよう。

なお、〈とまる〉のパターンと同じ様に、〈B で B' にすむ〉も筆者の直感では容認できるが、実際には(16)の様に〈B の B' に〉というパターンで生起し、〈山谷でドヤに住む〉という様な例はみあたらなかった。

(16) 山谷のドヤに住んでいる住民 (粉川, 1977: 170)

ところで、〈くらす〉の場合文献では(3)のパタン以外のものはみあたらなかったが、アンケートで〈養老院にくらす〉を27人中17人が可としたのは注目に値する。神尾(1980.60)では〈くらす〉は〈くに〉を取ることができない動詞として分類されているとのべたが、このアンケート結果からみる限りでは、〈くらす〉も間接的にであろうが、文脈によっては場所性のある程度持ち得るといえよう。

4.1.2 場所以外の格助詞との関係

いろいろな格助詞とこれらの動詞は共起可能であるが、ここでは〈で〉のみに限定して論じる。〈一人で住む／暮らす／泊まる〉という様に人数をあらわす場合はいずれの動詞とも〈で〉は共起可能であるが、〈年金で〉〈アパート収入で〉〈靴で〉というように手段・方法をあらわす場合は、〈くすむ〉〈とまる〉とは共起の可能性が低くなる。

(17) a. アパート収入で暮らす。

b. ^{*} アパート収入で住む。

c. ^{*} アパート収入で泊まる。

(18) a. アメリカ人は室内でも靴で暮らしている。

b. ^{*} アメリカ人は室内でも靴で住んでいる。

c. ^{*} アメリカ人は室内でも靴で泊まっている。

これらの生活の手段・方法をあらわす〈で〉を共なう表現が〈くらす〉と共起しやすいのは、やはり〈くらす〉の意味に生活が大いにかかわって

いることを示している。

4.2 様態の副詞との共起関係

〈別れて住む〉、〈家族全員で楽しく住む〉の様に〈すむ〉も副詞的表現と共起するが、文献資料で見る限りでは〈くらす〉のほうがはるかに多くの副詞的表現と共起している。たとえば(19)(20)の様に〈くらす〉だけが自然で他の動詞の場合は不自然であると思われるような例もある。

- (19) a. 好き勝手に暮らしている。
b. ? 好き勝手に住んでいる。
c. ? 好き勝手に泊まっている。
- (20) a. 気ままに暮らす。
b. ? 気ままに住む。
c. ? 気ままに泊まる。

これは、〈くらす〉は動詞性、すなわち中島(1987:129)のことばを借りるなら「生活行動」とのかかわりが強いから、動詞を修飾する機能を持つ副詞、特に生活活動を限定する副詞、と共起しやすいことを示している。前節ではのべられなかったが、この様態の副詞との共起関係の差異は、〈すむ〉と〈くらす〉の統語的のみならず意味的差異を明示する重要な特徴といえる。

5. その他

本節では〈スム〉をいかに表記すべきかという点、ならびに、〈すむ〉とその関連語句がいかに比喻的に用いられるかという点を文献資料を中心に論じる。

5.1 〈スム〉をどう表記するか

「例解新国語辞典」によれば、〈スム〉は、人が主体の場合は〈住む〉、

動物の場合は以前は〈棲む〉、現在は〈すむ〉と書くことが多いということである。事実 (1) ～ (3) の様に表記することが多いといえる。

- (1) 地域はスペイン人が多く住む少数民族の居住区で、…

(早川, 1984 : 168)

- (2) 日本にすむタテハチョウ科の蝶…

(毎日新聞, 1987 年 6 月 27 日夕刊)

- (3) どぶに棲んでいるカニがいるんですよ。 (谷川, 1979 : 108)

しかし、この原則は必ずしも守られているわけではない。たとえば、森田 (1984) では、人間・動物は〈住む〉、アンケート調査であまり良しとされなかった植物の場合は〈すむ〉と書かれている。また、動物の場合でも

- (4) (5) の様に〈住む〉が使われることもある。

- (4) 日本のいくつかの森には、ニホンザルが群れをつくって住んで
る。 (新版中学校理科2—分野上, P 55)

- (5) 長さが百メートルあるホームの屋根裏に住み着くハトは約五十羽。 (中日新聞, 1988 年 2 月 25 日夕刊)

(4) (5) は動物を擬人化しているというよりは、人間と動物の差を意識せずに漢字の〈住む〉が使われることがあるためであろう。従って、「例解新国語辞典」の説明は一応当を得ているといえるが、筆者の好みによる差異があるといえる。さらに、〈住む〉とあらゆる場合に書くやり方が勢力を得つつあるともいえる。

さて、実際に存在しない神話上の神々等の場合はどうであろう。(6)～(9)の例文だけでは、はっきりしたことはいえないかもしれないが、鬼、山童という様な動物性をかなり持っていると思われるものは〈棲む〉、〈妖精〉の様に人間性がかかなりそなわっているものには〈住む〉が使われるといっても良いであろう。これらの例からも、人は〈住む〉、動物は〈棲む〉と書くという原則がかかなり守られているといえる。

- (6) ヒンズー教神話に出てくる神々の住まう山

(谷川, 1979 : 230)

- (7) 妖精は、森や泉や遠い島あるいは地下の世界に住むといわれている。
(同上, p.190)

- (8) …, 東北を鬼の棲む方位として嫌うももっともなことである。
(塘, 1952 : 22)

- (9) 枇杷の木は山童の木じやった, 山の神さまの棲んでおらす木じやった。
(谷川, 1979 : 157)

5.2 比喩的表現

ここでは比喩的な表現を、中村 (1977 : 10-85) の様に細かく分類して考えるのではなく、直接指示されるものに対応する語句ではなく別の語を用いて指示するものを隠喩、一部あるいは、あるものの属性をあらわす語句でそのもの全体をあらわすものを換喩と定義する。なお、人間以外のものを人格化する擬人法的表現、逆に、人を物や動物に格下げをするやりかたを中村 (1977 : 42) にならって活喩と呼ぶことにする。

5.2.1 隠喩的表現

住む場所を指すのに〈うさぎ小屋〉, 〈うなぎの寝床〉, 団地を意味する〈ハコ〉という様な隠喩的表現が用いられることがある。(10) (11) (12) がその例である。

- (10) うさぎ小屋に住む働き中毒 (谷川, 1979 : 171)

- (11) だからうなぎの寝床に住んでいる人にとっては、寒いところでじっとひととこにいるということが非常に楽しい。

(人生読本一住まい, 1980 : 150)

- (12) ハコに住む住民をハコ族と呼ぶ。

(高度成長期を考える会, 1985 : 34)

さて、〈うさぎ小屋〉は日本人の狭い住居のことをいうのに用いられる表

現だが、長沼（1988：10）によれば、最近では〈うさぎ穴〉、〈鳥籠〉という表現も使われるということである。また、〈うなぎの寝床〉は『広辞苑』によれば「間口が狭くて奥行きの深い建物などのたとえ」とされている。いずれにせよ、これらの表現は人間の住居を動物のすみかにたとえたもの、すなわち、動物のすみかに格下げしたものである。

さて、(12)は団地をハコすなわち容器にたとえたものである。住む場所を容器にたとえることがあると同時に、家は身体にたとえられることもある。〈すむ〉と共起している例はみられなかったが、たとえば、垂水(1983：70)では、日本の伝統的な民家をその使われ方から、細胞分裂にたとえている。これは、葬儀、祝い事その他において、襖、障子等の建具(細胞膜)を取り払い広くし、それらの儀式が終るとまた元へもどすという日本家屋の特徴をとらえようとしたものである。また、建て増しの場合でも同質的空間を増すということが元来日本では多かったからこの様なたとえが生まれてくるといえる。一方、米沢（1982：60-81）では、子供の成長に従い限られた団地の空間の間仕切りを変えていく過程をやはり細胞分裂の過程にたとえている。さらに、米沢は、内と外という観点から、家族を守る家を家族の身体にもたとえている。「どんな古く醜い家でも、人が住むかぎりは不思議な鼓動を失なわないものである」と多気（1983）で述べられている様に家を身体にたとえることは良く行なわれる。

次に、(13) (14) の様に人間、あるいは、人間の頭や心を容器、もっと具体的にいえば、すみかにたとえているものもある。これは上記の家を身体にたとえるのとは逆のとらえ方である。(13) (14) において悪魔的なもの、あるいは、動物的な残忍さがそこにおける主体であると考えられるためか、〈棲む〉という字が用いられていることに注目したい。

(13) 人間という生態に阻まれているなにもんのか、わたしの中に棲んでいて、不安だか、ぐあいの悪さだかをかこっているせいかもしれません。
(谷川、1979：146)

(14) この残忍さは…わたしの魂の底にひっそりと棲みつづけていた。

(中村, 1977 : 429)

ちなみに、(14)は大原富枝の『婉という女』から引いたものである。

また、自分の描いた世界、観念が場所にたとえられている(15)(16)の様なものもある。

(15) (ロダンの家は)すべてはったらかしであったし、孤独であったけれども瞑想をする上には何の影響もないようだった。彼は自分の中に住んでいたのだ。

(吉阪, 1986 : 135)

(16) それでは、自分の書く世界の中にだけ住めるかということ、生身であるので自分の書いている世界の中にだけに居るわけにはゆかないですね。

(谷川, 1979)

この様にみえてくると、(10)～(12)の様に比較的わかりやすい隠喩表現から(15)～(16)の様にかなり抽象的な隠喩表現が住む、あるいは棲む、場所をあらわすのに用いられていることがわかる。これは〈すむ〉の場所性の強さを示している。さらに、住む場所を容器、家を身体、身体を家にたとえる例等がかなりあるということは、我々の想像力のたくましさのみならず、隠喩的な世界のとらえ方を、程度の差はあれ、我々は日常行なっているということを示している。

なお、〈くらす〉に関しては〈思い出とともに〉と共起している(17)、〈心理的葛藤のうちに〉と生起している(15)(16)に近い(18)という例しか見当たらなかった。

(17) 子供のころ通っていた学校の思い出とともに暮らすことになる。

(朝日新聞, 1987年6月29日朝刊)

(18) 『道草』の夫婦もあれほど心理的葛藤のうちに暮らしながら、子供だけは次々とつくっている。

(赤祖父, 1982)

5.2.2 換喩的表現

(19) はデザイナーとか建築家の作った家という意味で〈作品〉が用いられてい、(20) は〈屋根の下〉という表現で家をあらわしているから、住む場所がはっきりとした換喩的な表現で指示されているといえる例である。

(19) なんか、デザイナーとか建築家の作品に住むいうのいいやね。

(人生読本—住まい、1980:154)

(20) …、わが国では、まだ3世代が同じ屋根の下に住むケースもあります。(名大早川研究室、1975:8)

さて、(19) (20) ほどはっきりしていないが(21) (22) 様に場所を東西南北、遠近という様な方位だけで示すもの、(23)の様に日本を指すのに〈島国〉を用いるのも換喩的表現といえよう。

(21) 近くに住む福田千代さん(二一)が、…

(朝日新聞、1987年6月23日朝刊)

(22) ニホンザルは、サルのかなかまでももっとも北に住む種類である。

(新版中学校理科2—分野上:1987)

(23) 島国根性は、日本列島という島国に住んでいる狭い気持ということであると同時に、…

(国広、1977:80)

その他、これに類する表現が多々みられた。ある人をとらえてその人の職業からその人を〈サラリーマン〉といったりする様なことは良くあるが、これらまで換喩的な表現と考えるならば、かなりの数の名詞が換喩的な語句であるということになり、(21)～(23)に類する例は数限りなくあるといえよう。これは、ある物の一部あるいは属性をとらえる世界の切り取り方を、隠喩的なとらえ方と共に、我々が一般的に行なっているということを示している。それはさておき住む場所をあらわす換喩的表現が多くあるということは、それだけ〈すむ〉は場所性が強いということを示す。

5.2.3 活喩的表現

〈すむ〉という動詞と直接共起している活喩的表現は見当たらなかった

が、〈すむ〉に関連した名詞化表現には、(24)の様に野球のボールを擬人化したもの、(25)の様に明るさと暗さを生物化(動物化)したものがあった。

(24) 分身のボール安住の地に。(中日新聞, 1988年2月7日朝刊)

(25) 明るさと暗さとが共棲し, … (谷川, 1979: 234)

ちなみに、(24)は最近死亡した、高校野球でも活躍した、元プロ野球選手が大切にしたいボールが母校の高校に寄贈されたことを伝える記事の見出しである。

なお、(10) (11) にあげた〈うさぎ小屋〉〈うなぎの寝床〉〈うさぎ穴〉〈鳥籠〉も、人間の住居を動物のすみかに格下げした活喩的表現である。

さて、〈くらす〉に関してはどうかであろう。アンケート結果では動植物を主語にとる文を良しとした人がほとんどいなかったことから、〈くらす〉を動植物に関して用いるのは擬人化表現であるといえよう。(26)がその文献資料からの例である。

(26) ちょうど猫たちが寄りあって暮らすように…,

(谷川, 1979: 150)

〈くらす〉に関する例は(26)のみであったが、これを名詞化した表現としては、児童向けの図書に〈植物のくらし〉〈海そうのくらし〉というようなものがあった。また、人間の生活を植物にたとえた(27)の様なものもあった。

(27) 畳から根の生えた植物のようにじっとした二週間ばかり暮らして見たい。

(夏目, 1966: 426)

ただし、これは〈～のように〉を共有しているから直喩的表現であるといえよう。この様にみえてみると、そんなに例は多くないが〈くらす〉もある程度は擬人化、あるいは、擬物化して用いることができるということがわかる。

5.3 本節のまとめ

本節では主に文献資料から、〈スム〉にどのような文字をあてるかという点、並びに、〈すむ〉がどの様に比喩的に用いられるか、あるいは、どのような比喩的表現と共起するかという点をみてきた。文字に関しては、〈住む〉〈棲む〉〈すむ〉を使い分けている人も多いが個人的な差異があること、そして〈住む〉に統一される傾向がうかがわれる。比喩的表現に関しては、〈住む〉は場所をあらわす比喩的表現との共起例が多かったといえるが、これはやはり〈すむ〉という動詞は場所とのかかわりが強いということを反映している。また、その場所をあらわす表現が動物のすみか等にとえられるということは、住む場所に対する価値判断、さらには、住み方がかなり問題になっているということがいえる。また、〈すむ〉ほどではないが〈くらす〉も比喩的表現として、あるいはそれと共起して、使えることがわかった。

比喩的表現は人間の想像力の豊かさを反映するものだといわれることがある。〈すむ〉〈くらす〉、あるいは、それに対応する観念がこの豊かな想像力の対象となっているということを本節ではみてきた。このことから住む、暮らすという問題はわれわれが生きて生活していく上に、大きな比重を占めているということがわかる。

結論に代えて

主語＋が＋場所＋に＋同居者（物）と＋時間表現＋すむ

これが先きののべたように、動詞〈すむ〉を用いた文の基本構造である。本論文では、まず規範を示している辞書などレファレンス類の参照、次いでインフォーマントにたいするアンケート調査、さいごには、新聞雑誌を含む文献から集めた文例の基本構文を検討した。

動詞〈すむ〉の主語は、自己の行動に責任をとることができる存在でなければならない。語の共起関係の是非を問うアンケート調査によって、たとえば幼児はことばのうえでは住むことが難しいと判明した。老人や病人

はたとえ体力、経済力が不足しても自分で意志決定ができる以上、場所を選んで住むことができる。住むとは、自由空間の確保である点は、家父長制家族の住む家の場合も、現代の核家族や単身生活者の場合も同じであろう。ただ、イエ制度下の家は、家長にとってのみ自由空間であったが、現代ではそれぞれの人間が自由な私的空間を望んでいる。そこから誰が誰とともに住むか、家に住む主体は個人か家族かという現代的な問題が姿をあらわす。アンケート調査結果では、〈すむ〉の主語の項目と誰と〈すむ〉かという同居の項目の回答にバラツキが大きく、従来の家族観に何らかの変化が起こりつつあることが感じられた。家族の範囲の問題、また住むことと市民権や国籍との関連の問題はわれわれの今後の課題である。

〈すむ〉は一定の場所を定め、ある程度の継続を要求する行為であることは、〈すむ〉を動詞とする文の基本構造からも予想される。われわれはさらに、〈すむ〉がうけている時間的、空間的制限の範囲をアンケート調査によって探り、具体的にその範囲をしぼることを試みた。「たびたび」あるいは「ときどき住む」とか、「複数の場所に住む」など、かつては考えられなかった語の組合せが許容される傾向がみられ、現代生活の多様化のさまを垣間みるおもいがした。定住の内容が変りつつある。

統語論的分析からも、〈すむ〉の定義と用法には辞書類がまだ把握していない変化ないしは動揺が起こっていることが明かになった。「場所＋に＋住む」の代りに「場所＋へ＋すむ」という破格の文が新聞雑誌の紙面に登場している。新たな土地へと、たびたび転勤する人たちが増えて居るからだろうか。助詞にの代りにへが用いられると、〈すむ〉は「住んでいる」という形をとらずに「住む」と終止形でおさまリ、主体的に働きかける行為となる。さらには「こんどはニューヨークを住む」といった例文が考えられはしないか。すると〈すむ〉はいっそう積極的な、攻撃的でさえある行為となるであろう。〈すむ〉が積極性を増していることと、住むことの定義が、占有さらには私有の方向へ向っていることとは無関係ではないであろう。

〈すむ〉に起こっている変化の方向は、池上（1981）がいうところのナル的動詞からスルの動詞へ向う変化ではないかとおもわれる。日本語〈すむ〉と比較した以下の各言語における対象語にもそれぞれ程度の差はあれ、辞書類のかかげる規範を越える変化が起こっている。それぞれ変化しつつあるもの同志を比較する方法についても再検討の必要が残った。今回の調査結果は次につづく吉川論文、佐藤論文、水野論文の後に挿入した〈すむ〉と〈live〉、〈wohnen〉、〈habiter〉の対照表にまとめるにとどめた。

資料：アンケート結果

主語との共起（助詞は「が」）

		すむ	くらす	とまる					
1. 家族	○	26	22	23	10. 弟	○	25	21	23
	×	1	0	0		×	0	1	0
	?	1	1	0		?	3	1	0
2. 数家族	○	25	23	23	11. 男	○	27	22	23
	×	0	0	0	12. 女	×	0	0	0
	?	1	0	0		?	1	1	0
3. 集団	○	15	11	19	13. 夫	○	24	18	21
	×	6	7	2		×	1	2	1
	?	7	5	2		?	3	3	1
4. 国民	○	11	12	8	14. 妻	○	23	18	21
	×	11	6	14		×	2	2	1
	?	5	5	1		?	3	3	1
5. 一座	○	21	15	22	15. 妾	○	24	17	22
	×	3	5	0		×	2	3	1
	?	4	3	1		?	2	3	0
6. 王	○	22	12	20	16. 情夫	○	23	14	22
	×	3	5	1		×	2	4	0
	?	3	6	2		?	3	5	1
7. 親	○	27	22	23	17. 娘	○	25	22	23
	×	0	0	0		×	0	1	0
	?	1	1	0		?	3	0	0
8. 子供	○	22	19	23	18. 老人	○	28	23	22
	×	1	2	0		×	0	0	0
	?	5	2	0		?	0	0	1
9. 兄	○	23	21	23	19. 若者	○	26	23	21
	×	0	1	0		×	1	0	1
	?	5	1	0		?	1	0	1
					20. 女中	○	22	18	22
						×	2	1	0
						?	4	4	1
					21. 遊牧民	○	22	20	21

	×	4	1	0		?	6	3	0
	?	2	2	2					
22. 放浪者	○	20	15	22	32. 猫	○	20	5	3
	×	5	5	0		×	6	14	20
	?	3	3	1		?	2	4	0
23. 客	○	7	7	23	33. ゴキブリ	○	18	4	3
	×	15	14	0		×	6	16	20
	?	6	1	0		?	4	3	0
24. 神	○	18	4	3	34. 魚	○	19	3	2
	×	5	16	19		×	4	16	21
	?	5	2	1		?	5	4	0
25. 仏	○	11	1	3	35. 鳥	○	17	3	2
	×	8	19	19		×	4	16	21
	?	9	3	1		?	7	4	0
26. 幽霊	○	16	4	4	36. 松の木	○	0	0	1
	×	8	17	17		×	27	22	22
	?	4	2	2		?	1	1	0
27. 先祖	○	14	9	4	37. まりも	○	8	0	0
	×	6	9	17		×	15	22	23
	?	8	4	2		?	5	1	0
28. 子孫	○	22	17	6	38. 病原菌	○	11	4	2
	×	4	4	15		×	9	18	21
	?	2	2	2		?	8	1	0
29. 死者	○	12	6	4	39. 希望	○	4	0	1
	×	8	15	18		×	18	22	22
	?	8	2	1		?	5	1	0
30. 熊	○	22	4	3	場所との共起				
	×	5	16	20			すむ	くらす	とまる
	?	1	3	0	40. 下宿	○	23	17	22
31. 牛	○	14	3	3		×	1	3	1
	×	8	17	20		?	4	3	0

ことばに表れた家族と家——その3「住む」

41. ホテル	○	21	22	23		×	0	1	1
	×	1	0	0		?	1	0	0
	?	6	1	0					
42. 海の家	○	21	21	23	52. 地下	○	27	23	22
	×	4	1	0		×	1	0	1
	?	3	1	0		?	0	0	0
43. 学生寮	○	23	21	20	53. 屋根裏	○	26	23	18
	×	0	0	1		×	0	0	2
	?	5	2	2		?	2	0	3
44. 老人ホーム	○	26	23	16	54. 居間	○	11	14	15
	×	0	0	4		×	10	6	6
	?	2	0	2		?	7	3	2
45. 養老院	○	22	17	20	55. 台所	○	12	10	9
	×	3	5	4		×	10	8	10
	?	2	5	3		?	6	5	4
46. 別荘	○	23	21	20	56. 座敷	○	11	12	19
	×	1	1	3		×	9	7	2
	?	4	1	0		?	8	4	2
47. 蔵	○	21	18	17	57. 部屋	○	15	13	17
	×	1	3	4		×	9	5	3
	?	6	2	0		?	4	5	3
48. 物置	○	19	19	16	58. 女中部屋	○	20	19	20
	×	4	2	4		×	4	2	2
	?	5	2	3		?	4	2	1
49. テント	○	23	21	22	59. 船	○	18	19	16
	×	0	0	0		×	3	1	4
	?	4	2	1		?	7	3	3
50. 2DK	○	28	22	13	60. 車	○	11	13	16
	×	0	1	8		×	8	6	4
	?	0	0	2		?	9	4	3
51. 二階	○	27	22	22	61. 馬車	○	9	14	14
						×	7	6	6

		?	12	3	3	72. 企業	○	1	3	3
							×	22	20	21
62. キャンピン グカー	○	14	19	19			?	1	1	0
	×	1	3	2						
	?	13	1	1	73. 駅	○	8	17	17	
63. 刑務所	○	9	16	13		×	10	3	5	
	×	13	5	6		?	7	3	1	
	?	6	2	4	74. 道端	○	8	18	11	
64. 少年院	○	9	16	15		×	9	2	12	
	×	11	2	9		?	11	3	0	
	?	7	6	3	75. 橋の下	○	20	20	14	
65. 捕虜収容所	○	11	17	9		×	4	1	8	
	×	8	1	12		?	4	2	0	
	?	9	5	2	76. 公園	○	12	17	15	
66. 孤児院	○	14	15	13		×	9	3	6	
	×	6	9	9		?	7	3	0	
	?	4	0	2	77. 国外	○	28	23	11	
67. 病院	○	11	17	20		×	0	0	10	
	×	13	3	2		?	0	0	2	
	?	4	3	1	78. 国内	○	27	21	9	
68. 会社	○	9	4	18		×	0	0	12	
	×	9	17	7		?	1	2	2	
	?	9	3	2	79. 回教圏	○	23	22	5	
69. 学校	○	6	8	17		×	1	1	16	
	×	16	14	6		?	4	0	2	
	?	2	2	1	80. 英語圏	○	24	22	4	
70. 大学	○	7	11	19		×	1	1	17	
	×	12	13	5		?	3	0	2	
	?	5	0	0	81. 芸能界	○	8	18	1	
71. 軍隊	○	3	20	3		×	10	2	21	
	×	19	1	19		?	8	2	1	
	?	6	1	1	82. 上流社会	○	17	20	2	

ことばに表れた家族と家——その3「住む」

	×	4	3	19		?	1	0	0
	?	7	0	2					
83. 高齢社会	○	16	18	1	94. 客	○	6	10	21
	×	6	2	20		×	16	11	1
	?	6	3	2		?	6	2	0
84. 管理社会	○	18	17	1	95. 他人	○	23	26	26
	×	4	1	20		×	3	1	1
	?	6	5	2		?	1	0	0
85. 心の中	○	24	4	1	96. 犬	○	20	21	14
	×	1	17	20	97. 猫	×	3	2	9
	?	3	2	2		?	4	4	4
名詞＋と＋動詞					98. 家具	○	6	7	2
	?	すむ	くらす	とまる		×	14	14	19
86. 数家族	○	25	27	24		?	8	2	2
	×	1	0	2	時間を表す語との共起				
	?	1	0	1		すむ	くらす	とまる	
87. 国民	○	4	5	4	99. 5 日	○	14	13	23
	×	19	19	20		×	9	8	0
	?	4	3	3		?	5	1	0
88. 集団	○	12	15	9	100. 2 週間	○	19	18	21
	×	13	9	13		×	5	4	1
	?	2	3	5		?	4	1	1
89. 小学生 の子供	○	27	27	27	101. 4 ヶ月	○	25	20	18
						×	1	2	2
90. 男	○	0	0	0		?	2	1	3
91. 女	?	0	0	0	102. 半年	○	27	21	16
						×	0	2	5
92. 夫	○	27	23	23		?	1	0	2
	×	0	0	0	103. 朝から晩 まで	○	3	10	6
	?	1	0	0		×	19	12	17
93. 妻	○	26	23	23		?	6	1	0
	×	1	0	0	104. 平日に	○	14	12	21

	×	8	9	2
	?	6	1	0
105. 週末に	○	17	15	22
	×	7	8	1
	?	4	0	0
106. しばらく	○	28	21	22
	×	0	1	0
	?	0	1	1
107. 三度	○	12	7	19
	×	9	12	3
	?	7	4	1
108. 毎日	○	13	18	16
	×	10	4	6
	?	5	1	1
109. ときどき	○	16	17	23
	×	5	5	0
	?	7	1	0
110. たびたび	○	14	14	23
	×	5	6	0
	?	9	3	0

この家にはXが....

		すんで います	くらし ています	とまっ ています
111. 小学生 の子供	○	21	27	19
	×	2	0	4
	?	4	0	4
112. 男	○	25	24	27
	×	1	2	0
	?	1	1	0
113. 女	○	25	25	27

	×	1	1	0	0
	?	1	1	0	2
114. 夫	○	21	20	19	19
	×	1	2	4	5
	?	5	5	4	3
115. 妻	○	23	22	20	19
	×	0	2	4	5
	?	4	3	3	3
116. 他人	○	21	22	21	20
	×	5	2	6	4
	?	1	3	0	3
117. 犬	○	8	26	7	1
	×	16	1	17	24
	?	3	0	3	1
118. 猫	○	7	24	6	2
	×	16	2	18	24
	?	4	1	3	1

×とYが

×がYと + 動詞

すむ くらす とまる

119. 親と子供が	○	24	24	24
	×	0	0	0
	?	0	0	0
120. 子供と親が	○	23	23	23
	×	0	1	1
	?	1	0	0
121. 親が子供と	○	23	23	22
	×	0	0	2
	?	1	1	0
122. 子供が親と	○	22	22	22
	×	0	0	1

ことばに表れた家族と家——その3「住む」

	?	2	2	1
123. 夫と妻が	○	23	23	22
	×	1	1	2
	?	0	0	0
124. 妻と夫が	○	21	23	21
	×	3	1	3
	?	0	0	0
125. 夫が妻と	○	20	22	21
	×	2	1	2
	?	2	1	1
126. 妻が夫と	○	20	21	20
	×	2	1	3
	?	2	2	1

注

- (1) 本論文ではくゝは語そのものをあらわす。
- (2) 諸橋轍次『大漢和辞典』大修館書店、1960年。
- (3) 〈住む〉、〈澄む〉、〈済む〉を比較論述したものとして、以下のもの参照。
『国際研究』第3号、中部大学国際地域研究所、1986、p. 304. 荒木博『やまとことばの人類学』朝日新聞社、1985、p. 52. 谷川俊太郎他『住む』平凡社、1979、pp.12-19.
- (4) 住みごちが悪い。
- (5) 住みたい。
- (6) 女官などが内裏に居住すること。
- (7) 宮中などに宮仕えした女官などが自分の家に帰っていること。
- (8) 穴など穿ちえぐって住み荒らすこと。
- (9) 住みついたような顔。
- (10) 住みつくこと。
- (11) この世の中を住み捨てているような顔。
- (12) ①最後まで住む。②夫婦の関係が固く定まる。
- (13) ひとつの土地、家などに住み続ける。
- (14) 一定の住所に落ち着かないで、他へ浮かれ出る。
- (15) ①すみかを離れる。②男女の愛情が失せてよりつかぬようになる。
- (16) 別々にすむ、あちこちばらばらに住む。
- (17) こっそり住む。
- (18) 俗世間を捨て、人々から離れて暮らす。
- (19) ①……のような様子にして住む。②すみかとする。
- (20) ①多人数がひと所に住む。②満ち足りた気持ちで住む。
- (21) 住みにくく思う。
- (22) 生きていくことに思い悩む。

- (23) 生活費がかさんで暮らせなくなること。
- (24) 日々を暮らす。
- (25) 貧しさや寂しさのため、どのように暮らしてよいか思い迷う。
- (26) 〈暮らし煩う〉に同じ。
- (27) 江戸時代、諸大名の参勤道中、宿場の本陣に立てた札。
- (28) 朝、獵をするために、山中に宿泊すること。
- (29) 〈柾〉はからたち、〈棘〉はいばら、〈鸞鳳〉は鳳凰など高貴な靈鳥を意味する。
- (30) 様態を表す副詞的表現と〈すむ〉との共起関係の検討も必要であるが今回は行わなかった。今後の課題としたい。尚、この第3章では〈すむ〉のようにかな表記に統一した。
- (31) アンケートは各項目について23名から28名のインフォーマントに回答してもらった。そして、是とするか、非とするか、どちらとも言えないか、ということを判断してもらった。是とした数と総数(無回答も含む)とのパーセントを出し、下記のような記号に変換した。
- 100% 80% = ○
- 79% 60% = ○?
- 59% 40% = ?
- 39% 20% = ?×
- 21% 0% = ×
- (32) この三つはその他の場合に入れるのには抵抗があったが、3.1.1の各項目とは異質であると考えこの項に入れた。

参 考 文 献

- (1) 赤祖父哲二『日本のメタファー』東京大学出版会、1982年。
- (2) 橋本進吉『助詞・助動詞の研究』岩波書店、1969年。
- (3) 早川和男『朝日選書 25 一新・日本住宅物語』朝日新聞社、1985年。

- (4) 林四郎他編『例解新国語辞典』三省堂, 1984 年。
- (5) 池上嘉彦『するとなるの言語学』大修館書店, 1981 年。
- (6) 神尾昭雄「「に」と「で」」『月刊言語9』Vo1.9.No.9, 1980 年, pp. 55-63。
- (7) 河出書房新社編『人生読本一住まい』河出書房新社, 1980 年。
- (8) 粉川哲夫『スペースを生きる思想』ちくまライブラリー, 1987 年。
- (9) 高度成長期を考える会編『家族の生活の物語』日本エディターズスクール出版部, 1985 年。
- (10) 国広哲弥, 他編『岩波講座日本語 2—言語生活』岩波書店, 1977 年。
- (11) 森田良行『基礎日本語 3』角川書店, 1984 年。
- (12) 森田良行「動詞の語彙面と文法面」『国文学解釈と鑑賞』第51巻1号, 1986年, pp.17-27。
- (13) 諸橋徹次『大漢和辞典』大修館書店, 1960 年。
- (14) 長沼秀世「日本の住居格差」『英語教育』VOI.XXXVL, NO.15』1988 年, pp. 10-1 。
- (15) 名古屋大学早川研究室編『生活・住宅・環境』E&S, 1975 年。
- (16) 中村明『比喩表現辞典』角川書店, 1977 年。
- (17) 中島文雄『日本語の構造』岩波新書, 1987 年。
- (18) 夏目漱石『草枕—第二版』岩波書店, 1966 年。
- (19) 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』小学館, 1972 年。
- (20) 佐久間鼎『現代日本語法の研究』恒星社厚生閣, 1952 年。
- (21) 新村出編『広辞苑』岩波書店, 1978 年。
- (22) 尚学図書編『故事・俗信, ことわざ大辞典』小学館, 1984 年。
- (23) 多木浩二『生きられた家』青土社, 1983 年。
- (24) 谷川俊太郎編『住む』平凡社カルチャー today, 1979 年。
- (25) 垂水稔「住空間の内・外を分ける「敷居」」『生活文化史1』雄山閣出版, 1983 年, pp.66-70。

- 26) 塘一郎『これからの住生活』彰国社, 1952 年。
- 27) 山下秀雄『日本のことばとところ』講談社, 1979 年。
- 28) 米沢慧『〈住む〉という思想』冬樹社, 1982 年。
- 29) 吉阪隆正集刊行会編『吉阪隆正集 3—住居の意味』勁草書房, 1986 年。